

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 134

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 2661. スイスについての調査とこれからの探究
- 2662. 芸術教育の探究に向けて
- 2663. まだ見ぬ安住地
- 2664. 早朝に思うこと
- 2665. ロンドン旅行計画
- 2666. 土地勘を養う読書法
- 2667. 旅のち旅
- 2668. ロンドン旅行に向けて
- 2669. フローニンゲンでの音楽体験とデッサンについて
- 2670. 旅の計画
- 2671. 思わぬ訪問者とデッサンについて
- 2672. この夏のヘルシンキ旅行に向けて
- 2673. 物語り、物語られる人生
- 2674. デ・ホーヘ・フェルウェ国立公園及びクレラー・ミュラー美術館の再訪に向けて
- 2675. 小雨降る土曜日の朝に
- 2676. さざ波のような転調に向けて
- 2677. それがそれであること
- 2678. 作曲のステップ
- 2679. 今朝方の夢
- 2680. ルター教会での演奏会

気がつけば夕方の四時を迎えた。午前中はとても涼しく肌寒くもあったが、今は随分と気温が上がっている。気温自体は27度に到達しているようだが、それでも暑さは感じられない。窓の外に広がる景色を眺めると、燦然と輝く太陽に照らされて動植物が微笑んでいるかのようである。

今日はすでに二曲ほど曲を作った。一曲はショパンに範を求め、もう一曲はモーツァルトに範を求めた。偉大な作曲家の楽譜をスキヤフォールディングにして実践を積んでいくこと。今の私にとってこれが最良の実践であり、同時に最良の学びになる。

確かに午前中に読んでいた作曲理論の専門書なども良い学びにはなる。今後の作曲実践をより豊かなものしていくためには、少しずつ音楽理論や作曲理論に関する知識を拡充していく必要がある。そうしたことから、今後も少しずつそうした書籍を読んでいく。だが気をつけなければならないのは、それらの書籍を読むことを目的にしてはならず、徹頭徹尾、曲を作るという実践を最優先にしていかなければならないということだ。

実践に勝る学びはなく、実践によって得られる喜び以上のものを書物から得ることは難しい。今日の作曲実践と作曲理論の学習はここで切り上げ、これから論文の加筆修正に取り掛かる。

先ほどまでスイスへの旅行計画に思いを馳せ、スイスでの生活の様子などについてあれこれと調べていた。一昨年の夏にスイスのニューシャテルに滞在したが、それ以外のスイスの主要都市へはまだ訪れたことがない。少しばかり気が早いのが、来年の今頃には特に旅行の計画も入れていなかった。ジュネーブ、チューリッヒ、ローザンヌのいずれか、もしくはすべての都市に足を運んでみたいと思う。スイスについてあれこれと調べていると時間が経ってしまい、これから論文の執筆に集中する。

幸いにも一昨日の段階で山場を乗り越えたため、今日の執筆はより円滑に進んでいこう。先行研究に関するセクションの加筆修正が終わり、今日はそれ以降のセクションに加筆修正を加え、特に“Discussion”のセクションで言及する本研究の限界について新たに一つの項目について文章を書き加えようと思う。新たに見つけた限界が何であり、それをどのように説明していくのかの道筋はすでに明確だ。新たに二、三本ほど論文を引用する形でその限界について言及しておきたい。

---

---

論文の加筆修正を夕食前、もしくは夕食後の一時間以内に終わることができればと思う。そこから一時間ほどルドルフ・シュタイナーの“Art as Seen in the Light of Mystery Wisdom (1984)”を読み進めていきたい。この夏からはとにかく芸術教育や美学に関する専門書や論文を少しずつ読んでいく。あくまでも日記と作曲を主軸にしながらも、読書に関してはそれらのテーマに関するものを読んでいく。

それらのテーマはこれまでの自分にとって未知なものであるがゆえに、それらは自己の新たな側面を開いてくれるだろう。芸術教育の意義、そして美が人間の生にもたらす意義についての考察をゆっくりと進めていく。欧州で生活をし、この世界を旅しながら芸術と美の観点から人間存在を考えていく。少なくともそれは今後数年間続くテーマになるだろう。フローニンゲン:2018/6/6(水) 16:30

### 2662. 芸術教育の探究に向けて

太陽の光が少しずつ弱くなり始めた午後七時半。これから完全に日が沈むまでにはあと二時間半ほどある。

たった今夕食を摂り終えた。夕食を摂っている最中に、今の自分の関心が芸術教育に向かっていることの意味について少しばかり考えていた。皮肉なことに、思い起こしてみると、当事者としての自分、つまり義務教育時代の私は芸術教育というものがないがしろにしていたことを思い出す。当時の私にとって、なぜ美術や音楽の授業があるのかが理解できなかった。

いやこれについてはもう少し説明をしなければならない。義務教育時代に受けていた美術や音楽の授業そのものは私にとって楽しいものだった。粘土をこねたり、絵を描いたり、はたまたリコーダーを吹いたり、歌を歌ったり。それらのアクティビティそのものは実に良い思い出として記憶に残っている。

しかしながら、なぜそれらの科目に暗記を強いるような筆記試験があったのかが解せなかったことを思い出す。美術や音楽の授業そのものは良き思い出として残っており、実際にそれらの授業を通じてなされたアクティビティは今の私に少なからぬ影響を与えているように思う。だが、今でも私が不満に思うのは、本来感性や人格を育むことを主たる目的とするそれらの科目でも暗記を強いるような試験があったことだ。「このヒマワリの絵の作者は誰か？ ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ」「この写真の

---

作曲家は誰か？ベートーヴェン」こんなことを覚えるために芸術教育は存在しているのだろうか？  
今の私の最大の関心は、おそらく現在もこのような形でなされている日本の芸術教育にある。

ここ数日間考えていたのは、来年以降にどこに住み、何をしているのかということについてである。  
私はどうしても芸術教育についてより理解を深めたい。芸術教育の先端的な研究や芸術教育の手法について、そして芸術理論や芸術教育に関する思想を学びたい。しかもそれは厳密かつ激しく学びたい。

そうしたことから、今私は再びどこかの大学で芸術教育について学びを深めようと考えている。今回は科学者としてそのテーマについて探究をしない。実務家として、かつ思想家としての立ち位置で探究をしていく。そうなってくると、科学研究に力を入れる大学院ではなく、実践に重点を置く大学院が候補になるだろう。

今日も少しばかりその候補を調べていた。まだ確実に断言はできないが、芸術教育というのは博士課程で研究をしてもいいと思えるようなテーマからかもしれない。なぜなら、今の私にはその領域に関する知識はほとんどないのと同時に、激しい探究意欲があるからだ。ゼロから一つの領域を深く開拓していくことも不可能ではない。それはこれまでの自分が常にやってきたことだ。

博士課程に入るか否かは脇に置き、実践と理論の双方を重んじる大学院に入学することに向けた準備をしていきたい。また、博士課程も視野に入れて、今年的一年は特に独学を進めていこうと思う。まずは過去現在においてどのような学者が芸術教育について研究しているのかを調査してみることから始める。最初から調査の範囲を狭めることをせず、芸術教育について言及している全ての学者を対象にする。

兎にも角にも芸術教育という領域の土地勘をまずは養っていく必要がある。その後、芸術教育の意義、芸術教育の思想と実践方法などについて掘り下げていくような探究をしていきたい。新たな探究項目が少しずつ明確になり、それがまた日々の生きがいにつながっていく。フローニンゲン：

2018/6/6(水)19:48

---

## 2663. まだ見ぬ安住地

穏やかな早朝。今朝は一度五時半に目覚めたが、寝室から出たのは六時前だった。六時を少し過ぎてから一日の活動を開始させた。今日も昨日に引き続き良い天気である。六時半を迎えようとしている今において、すっかり太陽が昇り、明るい世界が広がっている。雲らしい雲は一切なく、晴天の様子だ。

風もほとんどなく、小鳥たちのさえずりがよく聞こえてくる。今日は天気恵まれているため、昼食前に近所のノーダープラントソン公園へランニングに出かけようと思う。初夏の様相を呈している公園を走り抜け、その足で行きつけのインドネシア料理店とチーズ屋に立ち寄る。今日は体を動かし、心身の状態を整える一日としたい。

ある一人の人間がある街で人間として暮らしていくこと。それを書き留めたのがこの一連の日記なのだ、ということ昨日改めて思った。

一人一人の生には物語がある。その物語が一体どのようなものであるかは当人にとっても未知なものが多分に含まれており、私は自分の人生の未知な物語をできるだけ明らかにするためにこの日記を綴っているのだと思う。また、人生の物語は著述していかなければ深まりようがないということ強く思う。昨日という一日も今日という一日も非常に貴重な一日として過ぎていく。

北欧にほど近いオランダのフローニンゲンという街で生きて行く一人の人間に体験される固有な毎日。それを書き留め、書くことを通じて毎日の中に意義を見出しながら進んで行く人生。

昨日あれこれとスイスについて調べていた。それは主にスイスへの永住に関する情報である。ここ最近似たようなことをオランダや北欧諸国に対して行っていた。オランダに関しては、この国にまたいつか戻ってきたいという思いが最近強くなっている。

できれば来年は一度国を変え、別の生活拠点で気持ちを新たにして探究活動に打ち込みたいと考えている。ただしその後には再びオランダに戻ってくるというのも選択肢として浮上している。その際はロッテルダム、アムステルダム、アイントハーフェンの郊外に住みたいと思う。オランダの落ち着いた

---

いた雰囲気と時間の流れ。国土は極めて小さいにもかかわらず、適切に確保された空間的なゆとり。

時間的かつ空間的なゆとりを考えてみた場合、オランダは私にとって魅力的な国だ。もちろん、主要都市の中心は密集しており、時間的かつ空間的なゆとりは希薄化される。それは現代社会の一つの悪しき側面であり、不可避な事柄でもある。街の中心部で生活することを避け、郊外の落ち着いた場所で生活拠点を構えたいという思いが湧き上がってくる。スイスや北欧諸国に関しても事情は同じであろうし、生活拠点の置き場所についても同じようになるだろう。

あとは本当に自分の魂が納得する場所なのかどうか、魂が安住の地としてそこを選ぶかどうかが大事になる。そうした場所を探す旅はまだ終わりが見えない。最後の生活地に落ち着くのはずっと後のことになるだろうが、そうした場所を見つけ出そうとする意識は常に持っておきたい。そうでなければ魂の安住地との真の出会いは得られないだろう。そのようなことをふと思う。フローニンゲン:2018/6/7(木)06:45

#### 2664. 早朝に思うこと

早朝のこの時間帯は、いつもゆっくりと一日の活動を始めるようにしている。起床してすぐに短めの身体運動をし、その後に内的感覚をデッサンする。その後に日記を書くというのが早朝にまず行うことの流れである。この流れに乗りながら一日の流れをゆっくりと前に進めていく。

全く焦ることをせず、とにかくゆっくりと朝の習慣的な実践に取り組んでいくことが大切だ。早朝のこの時間帯は、私が最も好む時間帯であり、今この瞬間には優しい朝日が街路樹の葉を照らし、小鳥たちの美しいさえずりが聞こえて来る。

書斎の窓を開けてみると、その美しい鳴き声がよりはっきりと聞こえて来る。朝日に照らされる街路樹の葉を眺め、小鳥たちの鳴き声に耳を傾けながら体を動かしたり、デッサンをしたり、日記を書いたりするのが早朝の実践となっている。

今日は一段と風が穏やかであり、朝日に照らされた街路樹が時折小さく揺れる。その揺らぎを眺めることもまた私を落ち着かせてくる。自己は絶えず揺らぎを経験している存在であるがゆえに、外界

---

の揺らぎを見ることは心を落ち着かせることに繋がるのかもしれない。揺らぎ同士が共鳴し合い、そこに同調現象が起こる。その同調が私たちにとってみれば癒しや安らぎになるのかもしれない。そのようなことをふと思う。

先ほど将来の生活地について書き留めていたが、本当のところはこれからどこに住むのか全くわかっていない。北海道に一年ほど住んでみたいという思いは若干あるが、今のところその選択肢の優先順位は低い。やはり私はまだ欧州や米国の地で学ぶべきことがたくさんあり、欧米の土地でしか養えないものを養う必要があると強く自覚する。将来の生活拠点について今この瞬間にあれこれ考えていてもしょうがないのだが、生活したいと望む場所に出会えるように感覚は絶えず解放しておきたいと思う。

探索的な意思を無意識の層に絶えず置いておき、場所に対して感覚を解放させておくこと。それだけは心がけておこうと思う。結局のところどこに住むかだけではなく、どこで何をしているかが一番大切なのだろう。とりわけ何をしているかについては本当によく考えていかなければならない。

いや、何をするのかについてはもう決まりきっているのだが、それをどのような次元で推し進めていくのかについて考える必要がある。自分の納得の行く場所で、毎日納得する形でライフワークに取り組んでいく。そうした意思と気概だけが強く自分の中に渦巻いている。今日もそろそろ本格的に一日の仕事に取り掛かることにしたい。フローニンゲン:2018/6/7(木)07:03

#### 2665. ロンドン旅行計画

書斎の窓の方から何やらカサカサと音がしたので近寄ってみると、何と一羽の小鳥がそこにいた。何やらどこかで見つけた餌をそこで食べているようであり、その光景はとても微笑ましかった。しばらくその小鳥を観察していると、もう一羽別の小鳥がやってきた。その小鳥も何かを口にくわえながら窓際でそれを食べている。

しばらく二羽の様子を眺めていると、あるところで二羽の小鳥はどこかに飛び去っていった。今日はこの二羽の小鳥以外にも、二度ほど小鳥が書斎の窓ガラスにぶつかってきた。おそらく大事には至っていないため安心しているが、今日はやたらと小鳥を身近に感じる日だ。



---

早朝に少しばかり今月中旬のロンドン旅行について計画を練っていた。当初は学会に参加する予定だったが、もはや学会での発表内容と自分で発表することにも関心がなくなり、学会参加はやめにした。それに伴いロンドンに行くかどうかを迷ったが、せっかくフローニンゲンからロンドンまでは近いので、この際に足を運んでおこうと思う。正直なところ私にとってロンドンはあまり魅力的な都市ではないのだが、これまで一度も実際に自分の足で歩いたことがないのだから——電車の乗り換えで数メートルほどロンドンの街を歩いたことはある——、食わず嫌いの形でロンドンを判断してはならないだろう。

これまでイギリスには合計で二回ほど訪れたことがある。一回目は大学生の頃にリバプールを訪れ、二回目は三年前にケンブリッジを訪れた。しかしこれまで一度もロンドンには縁がなかったことが不思議である。ちょうどフローニンゲン空港からロンドンの空港までは一時間ほどで行けるフライトがあり、ロンドンはとても身近に感じる。そうした地の利を活かして今月の20日からロンドンに少しばかり滞在しようと思う。

正直なところ全くもってロンドンに用事はなく、隣町に行く感覚でロンドンに足を運ぶ。滞在日数も最低限のものにし、四泊五日ぐらいが目処だろうか。20日の朝のフライトに乗れば、ロンドンには午前中に到着する。ロンドンとフローニンゲンの間には一時間の時差がある。

先ほどフライトの時間を確認したら、7:35フローニンゲン発の飛行機に乗れば、ロンドンには7:50に到着すると表示されていた。時間としてはもう一本遅らせて10:50フローニンゲン発のものに乗ってもいいかもしれない。とりあえず20日の午前中に出発すれば、ロンドンに午前中に到着し、午後からは観光することができる。ロンドンに到着したその日は、音楽関係の博物館に足を運びたい。

具体的には、ヘンデル・ハウス博物館に足を運びたい。ヘンデルはドイツ生まれの作曲家だが、のちにイギリスに帰化し、ロンドンの地で作曲活動に勤しんだ。バッハと同時代の作曲家であり、ヘンデルが残した音楽的な貢献は言うまでもない。今回ヘンデル・ハウス博物館に足を運ぶことによってヘンデルの生涯をたどりたいと思う。

もしその日に時間があれば、その足で王立音楽院ミュージアムに足を運んでもいいかもしれない。ここにも音楽関係の貴重な資料が展示されており、それをこの目で確かめたいと思う。今のところ予

---

定としては、21日と22日の二日間をかけて大英博物館を見学する。仮に初日に王立音楽院ミュージアムに行く時間がなければ、毎週金曜日は大英博物館が夜の八時半まで開いているということもあり、22日に王立音楽院ミュージアムに足を運びたい。

23日はナショナル・ギャラリーに足を運び、特にゴッホやルノワールの絵を中心に観賞したいと思う。そして24日の午前か午後の早い時間帯にロンドンを出発する。そのような短い旅を計画している。

思い返してみると、英語圏に旅行に行くのは三年前にケンブリッジ大学を訪れて以来のことになる。そう考えてみると久しぶりに英語を母国語とする国に行くことになる。オランダでも言葉に関しては何不自由ないが、それでも英語圏に行く時の安心感はまた別物である。ロンドンへの旅は短いですが、ここでもまた重要な経験を積むことになるだろう。フローニンゲン:2018/6/7(木)09:50

#### 2666. 土地勘を養う読書法

時刻は夕方の四時を迎えた。今日は一日を通して気温が高く、日差しが強い。昼食前に近所のノーダープラントソン公園へランニングに出かけた時には汗を随分とかいた。ちょうどこの時間帯が気温が高く、今は29度に達している。

フローニンゲンは湿気がそれほどないためか、この気温でもクーラーは全く必要ない。実際に今は書斎の窓を開け、西日が入ってこないようにカーテンを閉めていれば全くもって快適に過ごせる。そもそもこの街の建物の多くにはクーラーなどないという理由がはっきりとわかる。明日は少しばかり天気が崩れ、一日中曇り空となり、午後には少しばかり雨が降るようだ。明後日以降からまた気温が下がり、来週は最高気温が20度を下回る日が続く。

午前中、「閉ざされた氷の扉」というイメージが突如やってきた。何の前触れもなく、そのイメージが突然自分の内側に姿を現した。とてもひんやりとした扉が目の前にあって、その向こうの世界は未知である。その扉の向こうには全く別の世界が確かに存在していることがわかる。

その扉に手をかけてそれを開けるのか否か。扉の先にどのような世界が待っているのかを想像しながら扉を開けようとするようなイメージが自分の内側を通り過ぎていった。あの心象イメージは一体何だったのだろうか。

---

今日は午前中に“Art and Philosophy: Readings in Aesthetics (1964)”を100ページほど読み進めた。読み進めたと言っても精読ではなく、今回は初読であるからどのようなことが書いてあるのかを確かめるようにして読み、時折自分の関心を強く引く箇所に立ち止まってそこを丹念に読むようにした。

現在、美学に関する探究に少しずつ着手している。この探究は焦らず着実に進めていく必要がある。美学に関する専門書の内容が最初のうちは理解できなくても全く問題ない。学習というのはそのように進んで行くのだから。

実際に自分が発達理論を学び始めた時のことを思い出してみるといい。発達理論を学びたての頃は専門書に書かれていることがほとんど理解できなかったが、専門書を毎日数年間読み続けることによって徐々に内容が理解できるようになっていった。それと全く同じことを美学の探究で行えばいいだけであり、それは他の分野の探究においてもそうだ。作曲理論や音楽理論を学ぶ際においてもそうだろう。

とにかく学習の初期においては知識体系が構築されておらず、その領域の土地勘がないのであるから、迷子になることも当然であり、前に進むことが困難なのは当たり前である。そうした状況に置かれていたとしても少しずつ着実に進むことが重要だ。その時に有効なのは、今自分が行っているように、最初から専門書を精読しないということだろう。とにかく大量の専門書の全体像を掴むように読み進めていき、一読を早々に終え、土地勘がある程度獲得されてから再度繰り返しそれらの書籍を読んでいくのが賢明だ。

二読目に関しても精読はまだ必要ではなく、初読の際とほぼ同じように読み進めていけばいい。ただしその時には初読の時に立ち止まった箇所はより深く考え、初読の時に見逃していた自分にとって重要な箇所を発見するように読み進めていく。

私の場合、精読をする書籍というのは本当に少なく、三読目、四読目までこのような形で読み、それでもまだその書籍から得るものがありそうであれば、最初から最後まで通して読むことにしている。その書物が長ければ長いほど、初読時に最初から最後まで読もうとするのは愚行である。

---

その領域の土地勘があるのならそうしてもいいかもしれないが、土地勘がないのであれば、最初の数ページ以降からは即座に迷宮に迷い込むことになるだろう。結果として迷宮の最後に辿り着くことができず、迷宮の外に追い払われることが落ちである。そのため、とにかく最初は精読などせずに、土地勘を形成するような読みをしていく必要がある。そして兎にも角にも反復してその書籍を読むことが重要だ。

この夏からは再び大量の文献を読み進めていこうと思っているが、その際には上記のことをとにかく忘れないようにしたい。美学にせよ、作曲・音楽理論にせよ、それらの分野にはまだ土地勘がないのであるから、精読などしないようにする。この夏からの集中的な読書によって豊穡な土地勘を養っていきたいと思う。フローニンゲン:2018/6/7(木)16:25

#### No.1055: Flowery Greetings

Today is cloudy and chilly in Groningen. In such an environment, I'm listening to flowery greetings in my inner world. Groningen, 08:00, Monday, 7/9/2018

#### 2667. 旅のち旅

昼食前にランニングに出かける際に家を出ると、郵便受けに一冊の書籍が届けられていることに気づいた。ランニングから戻ってきて早速中身を確認してみると、先日注文をしていた“Expanding Tonal Awareness: A Musical Exploration of the Evolution of Consciousness (1992)”だった。この書籍は一般的な音楽理論とは随分と毛色が異なる。というのも、ルドルフ・シュタイナーの色彩理論や音楽理論を参考にする形で執筆されているからである。

本書で大変興味深いのは、シュタイナーの意識の形而上学思想と伝統的な音楽理論を見事に組み合わせて独自の音楽理論を展開している点だ。思っていた以上に書籍の型が大きく、それでいて中身の文字は細かい。

音楽理論を解説しているたいの書籍は、確かに学術的に正しいことを必要なだけ説明をしているのだが、いかんせん記述方法がつまらないものが多い。それに比べると、この書籍は既存の音楽理論書にはない観点で音楽理論を解説している点でユニークであり、それでいて伝統的な音楽

---

理論の知見もないがしろにしている点が優れていると思う。まだ中身を詳しく読んだわけではないが、中身をざっと確認してみるとそのような印象を持った。この書籍も繰り返し読み込み、自分の作曲実践に活かしていきたいと思う。

美学にせよ、作曲・音楽理論の書籍にせよ、それらに関する書物を読んだら、即座にそれが実践に滲み出てくるようにしていきたい。それがすぐに形になるかどうかという意味ではなく、精神的な態度としてそれが滲み出てくるようになり、それがいつか自分の作品として形になって出てくるようにしたいと思う。本書もまた自分の肥やしになってくれることは間違いないであろう。本書の到着をもって、この夏から始まる今年一年間の探究の準備は整ったと言える。あとは本当に必要な書籍だけを購入するようにしたい。

今のところ自分が必要だと思う書籍は十分手に入り、まずはそれらの書籍を繰り返し読み込んでいくことを最優先にする。手を広げすぎるのではなく、直近で購入した書籍だけでも十分な量になるのであるから、これまでに購入した書籍を何度も読み、それらとできる限り親しくなっていくようにしたい。夏から始まる新たな探究活動が非常に楽しみだ。

今日は午前中にロンドンの旅行計画をざっと立てた。滞在中にどこを訪れるのか、そして宿泊するホテルとフライトを確認した。今日の夜にでもホテルとフライトを確保しておこうと思う。ロンドンへの旅行計画を立て終わると、そこから少しこの夏以降の旅行計画についても全体像を再度描き直した。まず来月には二泊三日ほどオランダで国内旅行をする。

以前の日記で書き留めていたように、オディロン・ルドンの特別企画を見に行くためにクレラー・ミュラー美術館へもう一度訪れる。いかんせんフローニンゲンからそこまでは距離があるため、今回もデ・ホーヘ・フェルウェ国立公園近くのホテルに宿泊する。昨年この国立公園近くのあるホテルに宿泊したのだが、本当に静かで素晴らしい環境だった。今から六年前に、米国のヨセミテ公園の中にあるロッジに泊まった記憶がふと思い出される。

あの時も大自然の静けさに心を打たれ、そしてその壮大さに感動したのを覚えている。来月もまた自然の中に入ることによって、自己及び自然と深く繋がりたいと思う。

---

八月はスウェーデンとフィンランドに旅行に出かける。この時は両国の主要都市を訪れることになるだろうが、できるだけ自然が感じられるような場所に宿泊する。九月にはドイツのデュッセルドルフとボンを訪れ、十月には五年振りに米国のボストンを訪れようと思う。

当初イタリアとエジプトへは今年の年末か年明けを予定していたのだが、11月の中旬あたりに両国を訪れる。12月はあえてどこにも旅行には出かかず、フローニンゲンで静かに暮らす。その代わりに年が明けた一月には、ノルウェーのオーロラ観測クルーズに乗船しようと思う。クルーズの期間としては一週間ぐらいのものを選ぼうと思う。10日を越すクルーズもあるようだが、それはまた今後の楽しみとしたい。

二月にはベルギー、三月にはギリシャとトルコ、四月にはスペインとポルトガル、五月にはクラクフ(ポーランド)とアウシュビッツ、六月にはスイスを予定している。このように書き出してみるとここからの一年間は随分と多くの場所に出かけることになる。

私の生活は本当に極端であり、普段は近所のスーパーにしか外出をしない。特にこの夏からは学術機関に所属しないことに決めているので、大学に足を運ぶ必要もない。そうなるとなおさら外出はしないことになる。そのような生活の中に毎月ポツリポツリと旅行が入ってくる。

ここ最近ふと思ったことがあり、それは私はある年齢に達したらピタリと旅行をしなくなるかもしれないということだ。もちろん四年に一度ぐらいは船旅で世界を回りたいと考えているが、飛行機を用いた旅行はある年齢を境にもはやしないように思える。自然の中で静かに時を過ごしていくような日々。そのような日々が遠い未来に待っているように思えてくる。

ただし今はまだそうした時期ではなく、特に今年はせつかく欧州で自由な時間があるのだから、出不精の自らを鼓舞する形で積極的に旅に出かけたい。実際には自らを鼓舞するような必要は一切なく、自分の魂が旅を求めている。これまでよりももっと激しい内面の旅を求めている。今はそれが単に外側の旅となって形に現れ始めているにすぎないのだ。フローニンゲン:2018/6/7(木)16:59

No.1056: A Fragment of Passionate Memory

---

Zest is not a hodgepodge of fragments of passion but their whole. Groningen, 08:21, Monday,  
7/9/2018

### 2668. ロンドン旅行に向けて

今朝は五時過ぎに起床し、五時半から一日の活動を開始した。ここ最近よりも一時間ほど早い活動開始となる。早朝のフローニンゲンは晴れていて、昨日の段階での天気予報と少し様子が異なるようだ。今日は昨日に比べて涼しく、一日を通して過ごしやすくなるだろう。深夜に雨が少しばかり降るようであり、明日は断続的な雨に見舞われるとのことである。

昨日は普段よりも30分以上も遅く就寝をしたのだが、起床した時間は一時間ほど早かった。昨夜は今月の中旬のロンドン旅行に関して航空券やホテルの予約をしていた。航空券に関しては速やかに予約ができたのだが、ホテルに関してはロンドン市内に迷うほど多くのホテルがあり、どれにするのかに若干の時間を要した。しかし、主要な美術館や博物館へのアクセスの良さや金額的などころですぐに絞り込みができたので、ホテルを選択するのにそれほど多くの時間がかかったわけではない。

ただし、最初に宿泊したいと思ったホテルのオフィシャルサイトを通じて予約をしようとする、クレジットカードの認証画面がどうやっても表示されず、随分と手こずった。そのオフィシャルサイトにメールを送ると、すぐさま返信があり、どうやらブラウザーか何かの問題だったようだ。だが、ブラウザーを変えてみても、端末をPCではなく携帯にしてみても、一向に認証画面が現れることはなく、結局そのホテルを予約することを諦めた。その代わりに、そのホテルの近くにあり、価格帯もほぼ同じぐらいのホテルを予約することにした。

ロンドンの中心部のホテルがあまりに高額だったため、最初は空港近くのホテルか中心部まで電車で行ける距離のホテルにしようかと思っただが、滞在期間中に毎日電車に乗って市内に出てくるのが面倒であったので、結局ロンドン市内の中心部のホテルに宿泊することにした。

そこから大英博物館へは歩いて数分であり、二日間大英博物館に通おうと思っていたため、宿泊先のホテルの立地は良いと言える。このホテルを探している時に偶然ながら、ディケンズ博物館を見つけた。英国を代表する作家であるチャールズ・ディケンズの資料がこの博物館に所蔵されてい

---

るようだ。「創造する人」としてのディケンズに関心があるため、ぜひともこの博物館にも足を運ぼうと思う。

航空券を予約する時に、行きの便はフローニンゲンを10時に出発するものをすぐに確保することができたが、帰ろうと思っていた日にはなかなか良い便がなかった。少々遅い便しか残っておらず、結局当初の予定よりも一日長くロンドンに滞在することにした。このおかげで、ナショナルギャラリーにも二日ほど足を運べるかもしれない。大英博物館にせよ、ナショナルギャラリーにせよ、入場料が無料ということなので、二日間をかけてゆっくりと巡りたいと思う。

滞在日数の延長に伴い、ロンドンの市内に見るものは他にないかをもう少し調べておこうと思う。基本的には美術館や博物館を訪れることが今回の旅の目的であるため、その他に足を運びたいと思う美術館や博物館がないかを調べておく。今回集中的にロンドン市内を巡ることによって、次回英国に来る際はロンドン郊外や他の街を巡ることに時間を充てることができるだろうと期待している。フローニンゲン:2018/6/8(金)06:56

#### No.1057: Waking from a Nightmare

I was recollecting the dream I had last night. Dreams are mirrors to reflect our shadows. The dream that I had last night is not a nightmare, but I remembered the sense of waking from a nightmare, which makes our blood freeze. Groningen, 08:33, Tuesday, 7/10/2018

#### 2669. フローニンゲンでの音楽体験とデッサンについて

早朝には太陽の姿が見え隠れしていたが、午前中も半ばを過ぎると、急に陰りがちな天気となった。昼食を摂り終えた今も空は薄い雲で覆われている。そのおかげもあってか今日はとても涼しい。

書斎の窓を開けていると、爽やかな風が時折流れ込んでくる。明日は天気が崩れるため、先ほどスーパーで買い物を済ませてきた。今日が平日だと思えないような穏やかな雰囲気フローニンゲンの街に立ち込めている。落ち着きのある時間の流れ。そしてゆとりのある空間。

こうした時間と空間の中で日々を過ごすことは、今の私にとってどれだけ大事なことか。落ち着いて自分の探究活動や創造活動に従事するためにはこうした環境がとりわけ不可欠となる。

---



---

ふとスケジュールを確認すると、明後日は街の中心部にあるルター教会でバッハのアンサブルコンサートがある。これは以前から楽しみにしていたコンサートであり、いよいよそれが明後日に迫ってきた。ルター教会は行きつけのインドネシア料理店の近くにある。コンサートの開始は15時であるから、日曜日でも午前から十分に仕事に取り組み、その後でコンサートに足を運びたい。

今年の年末はピアニストのマリア・ジョアン・ピレシュがフローニンゲンにコンサートにやってきて、幸運にもそのコンサートに参加することができた。今年の秋にはフローニンゲンを象徴するマルティニ教会でバッハのパイプオルガンのコンサートがある。ルター教会での今回のコンサートを含めて考えると、こうした音楽体験が豊富に近くにあることには感謝をしなければならないだろう。明後日のコンサートが今から楽しみである。

午前中にふと、過去作曲した曲を聴いていると、冷風と同時に霊風のイメージが喚起された。この世界には両者の風が吹いている。自分の内側にそれらの風が吹き抜けていったことを感じた。

ちょうど数日前に、メキシコに留学していた友人とカフェで話をした時、平壤とワルシャワの雰囲気には似たものがあると聞いた。私は平壤には行ったことがないので二つの都市の雰囲気を比較することはできないが、ワルシャワにはこの春に訪れたばかりであるため、その比較を聞いてみると、平壤の雰囲気が体感を通じてイメージできた。先ほど自分の内側を通り抜けて行った二つの風は、平壤とワルシャワの街に特に合致するような感覚質を持っていた。

このところ内的感覚をデッサンすることが完全に習慣となった。今朝も起きてすぐにデッサンをしていると、ふとデッサンで奥行きを表現していくにはどうしたらいいのだろうかと考えた。これまで自分が描いたデッサンを眺めてみると、どれも平面的である。二次元的なデッサンから三次元的なデッサンにするための技術を習得したいと思った。これは俗に言う遠近法を活用した技術なのだろうか。

そもそも抽象的な内的感覚をデッサンしているため、それは物質的ではないために影を付けることは難しいのだが、描いたものに影を付ける工夫をすることによって奥行きを表現できるかもしれない。このあたりについても独学で色々と学んでみようと思う。デッサンに関しても作曲に関しても、奥行きを表現することができればと思う。

---

これが実現されれば、そもそも音楽には時間が内包されているために、四次元的な表現が実現されることになるだろう。究極的にはこの四次元を变幻自在に変容させたり、n次元の世界まで表現できればと思う。そのようなことを思いながら昼食後の仕事に取り掛かることにする。フローニンゲン：  
2018/6/8(金)13:24

No.1058: The Moonlight on a Wheat Field in the Early Summer

A fresh wind is blowing in a wheat field, and the moon is shedding the light on the field, though it is noon. Groningen, 08:53, Tuesday, 7/10/2018

2670. 旅の計画

昼食前にショパンに範を求めて一曲作り、昼食後にモーツァルトに範を求めて一曲作り終えた。時刻は午後四時に近づきつつある。

午前中は居てもたっても居られなくなり、思いつきで今後の旅先についてあれこれと調べていた。せつかく欧州で生活をして、さらにこの一年間は比較的自由な時間があるのであるから、積極的に旅に出かけようとするのもわからないではない。ただし、あまり旅を詰め込みすぎてもそれはそれで問題だろうと思っている。旅に出かけた後にその旅を振り返り、旅の経験を十分に咀嚼する時間が必要になる。

そうしたことを考えて、あまり旅を詰め込みすぎないようにしようと思う。自分が本当に足を運びたい場所にだけ旅に出かけることにする。そうなってくるとこの夏の旅先はどここの国のどの地域に行くか悩む。今月の中旬にはロンドンに行き、そこでは主に美術館と博物館を巡る。

七月はオランダのデ・ホーヘ・フェルウェ国立公園に再び足を運び、クレラー・ミュラー美術館を訪れる。ここでは確かに美術館に行くことがメインだが、国立公園の自然を味わうというのも大切な目的だ。

それでは八月にはどここの国のような場所に出かけたらいいのだろうか悩み始めた。当初の予定では、スウェーデン、フィンランド、アイスランドに行く予定だったが、少々欲張り過ぎかもしれないと思っている。来年の初旬にノルウェーのオーロラ観測クルーズに参加するのであれば、この夏の

---

---

旅は少し控えめのものにした方がいいように思う。そうでなくてもこの秋にはイタリアとエジプトに足を運ぼうと思っているのだから。

そうしたことを考えると、この夏の旅行はスウェーデン、フィンランド、アイスランドのいずれか一つの国に訪れる程度にとどめようかと思う。どの都市で何をするかを慎重に検討していこう。

今日は午前中に美学関連の書籍を読み進めていた。かなり分厚い書籍だったが、一読目を終えた。書籍に関しては特に関心を引く箇所だけを中心に読み進めていく。興味を引かない箇所は無理に読む必要などない。どんどん飛ばし読みをして、とにかくまずはその書籍の概要を把握し、自分の関心を掴む箇所を読み進める中で得られるものを得ていく。

今日はこれから就寝までの時間に向けて旺盛な読書を行っていきたい。ウォルター・ピストンのハーモニーに関する書籍の二読目を進めていき、それに合わせて、古代ギリシャ音楽に関する“Ancient Greek Music (1992)”の初読を始める。後者の書籍を読むことによって、大英博物館で古代ギリシャに関する所蔵品を見るときに何か喚起するものをもたらすかもしれない。確かに所蔵されているのは物品だが、古代ギリシャの音楽が誕生した背景を学ぶことは、それらの品々を見るときに新たな観点をもたらしてくれるように思う。

また、実際に来年の春にギリシャを訪れた際の経験を豊かにしてくれることにもつながってくると思う。いずれにせよ、今日はこれからそれらの書籍を中心に読み進めていく。明日と明後日もそのような一日になるだろう。フローニンゲン:2018/6/8(金)16:10

### 2671. 思わぬ訪問者とデッサンについて

姿の見えない小鳥たちが静かに鳴き声を上げている。今、その鳴き声に静かに耳を傾けている。透明な世界に響き渡る静かな音。吹き抜けるそよ風の音が聞こえてきそうな雰囲気の中、小鳥たちの声が淀みなく流れていく。

そういえば今日もまた昨日に引き続き、二羽の小鳥が書斎の窓の近くにやってきて何かをしていた。今日は餌をくわえている様子もなく、窓の縁に休憩をしに来たようだった。カサカサと音がするので窓の方にそっと近寄ってみると、ひょっこりと二羽の小鳥が可愛らしい顔を覗かせた。当の本人たち

---

はこれらの存在に気づいていないようであり、目をキョロキョロさせながらどこかを見ている様子だった。

小鳥の毛並みや体つきなどをしばらく観察していると、一羽が飛び去って行き、それを追いかけるようにもう一羽も飛び去っていった。ここ数日間でやたらと小鳥たちが窓の近くにやってくるので、巣か何かがあるのかもしれない。

昼食を摂り終えた後、少しばかりデッサンについて調べていた。特に、立体感を出すための技術について調べていた。やはり私が思っていたように、大きなポイントは影の付け方にあるようだった。また、線の濃さを調節することによって立体感を出すことも可能なのだと知った。

もちろん私は絵描きになるわけではないから本格的に絵を描く技術を学ぶ必要はない。しかし、もう少し立体感のあるデッサンを描けるようになればという思いがある。そうしたことから少し調べ物をして、学んだことを活かして実際に内的感覚をデッサンしてみた。本来デッサンというのは目の前にある物体を見てそれを描くことを指すのだろうが、私の場合は目の前にない抽象的な内的感覚や内的イメージを具現化させることをデッサンと呼んでいる。

この実践に関しても作曲実践と同様に、気長に学習と実践を続けていきたいと思う。何か特に目的があるわけでも、生活の糧にしようと考えているわけでも一切なく、単に内的必然性に促される形で曲を作り、デッサンを描く。デッサンについては今後一冊程度実践書を購入してみるのもいいかもしれない。ただし、そこで具体例として紹介されている物体についてはほとんど関心がないであろうから、いろいろと工夫が必要になるだろう。

そうした書籍を購入する以外の方法としては、ゴッホや横山大観などの自分に多大な影響を与えた画家の画集を眺め、それを参考にしてみるのもいいかもしれない。デッサンについては緩やかにその技術を高めていく。最優先させるべきは作曲技術を涵養していくことである。今日はこれから夕食までの時間をハーモニーの技法に関する専門書と古代ギリシア音楽に関する専門書を読むことに充てていく。

夕食後はそれらの書籍から離れ、今日届いたメールに対して返信し、その後、過去の日記を編集することに時間を充てたい。そして就寝前に、ゴッホのドキュメンタリーDVDを今度は英語ではなく、

---

---

あえて日本語吹き替えで視聴する。そうした形で静かに今日を終えていきたいと思う。フローニンゲン:2018/6/8(金)17:26

## 2672. この夏のヘルシンキ旅行に向けて

時刻は夕方の七時半を迎えた。結局今日はこの時間帯まで雨が降らなかった。どうやら深夜に雨が降るらしく、明日は一日を通して断続的に雨が降るようだ。

先ほど、再来週に迫ったロンドン旅行に関して少しばかり調べ物をしていると、嬉しい偶然があった。なんと、ロンドン市内で予約したホテルの目と鼻の先に大英図書館があることに気づいたのだ。ホテルから大英図書館までは本当に歩数が指を折って数えられるぐらいの距離である。私はこの偶然に純粋な驚きと嬉しさの感情を持った。

というのも、以前から一度大英図書館を見学してみたい、いやゆっくりとその場で時を過ごしたいと思っていたからだ。ホテルの近くにはその他にもチャールズ・ディケンズ博物館があるように、ディケンズも足繁くこの図書館に通ったそうだ。

私が大英図書館に強く惹かれるようになったのは、カール・マルクスに関する書籍がきっかけだったように思う。その書籍の中に、マルクスが長大な年月にわたってほぼ毎日大英図書館に足を運び、あの『資本論』を完成させたという記述があった。その記述を読んだ時、マルクスが規律と克己を持って通い詰めた大英図書館にいつか自分も足を運びたいと思っていたのである。それが今回思いもかけない形で実現されることになった。

繰り返しになるが、大英図書館は宿泊予定のホテルから本当に近い距離にあるため、観光を終えた足で何回か図書館に通いたいと思う。こうした偶然に恵まれたことに本当に感謝したいと思う。

夕食後、八月に予定している北欧旅行の訪問先についてももう少し調べていた。昨年の北欧旅行ではデンマークとノルウェーを訪れ、特にノルウェーを代表する作曲家のエドヴァルド・グリーグと画家のエドヴァルド・ムンクの軌跡を辿った。それと同じように、今回はジャン・シベリウスの生涯を辿り、フィンランドの絵画芸術を見にヘルシンキに行くことに決定した。スウェーデンとアイスランドはまた今度じっくりと巡ろうと思う。

---

調べてみると、ヘルシンキから電車で二時間弱のトゥルクという街にシベリウス博物館があることを発見した。忘れられない思い出として残っているのは、今年の夏にベルゲンを訪れた際に、グリーグ博物館に行き、そこでランチコンサートを聴いたことである。調べた情報によると、シベリウス博物館でも毎週水曜日にコンサートが行われているようだ。博物館の開館が午前11時であるため、ヘルシンキを午前九時前に出発すれば十分に開館時間にも間に合う。

今回はヘルシンキ市内に宿泊し、早朝の列車に乗り、フィンランドの森を抜けながらシベリウス博物館に向かいたい。水曜日のコンサートは夜に行われるため、そこだけが難点であり、白夜の時期とはいえ、あまり就寝時間を乱したくはないので少しばかり考えたい。

もう少しヘルシンキについて調べてみると、フィンランドの絵画芸術を理解するために、アテネウム美術館とシネブリュコフ美術館の二大美術館に足を運びたいと思った。その他に見たいものがないかをまた改めて調べてみたいと思う。八月はヘルシンキに四泊五日か五泊六日ほどの小旅行に出かけることに決めた。今年の夏にグリーグと出会えた幸運、今年の夏にシベリウスと出会える幸運に感謝をしたい。夏の旅行に向けてまた一日一日を大切に過ごしたい。

今日もまだあと二時間弱ほど自分の探究に打ち込む時間がある。なんと幸せなことだろうか。フローニンゲン:2018/6/8(金)20:18

### 2673. 物語り、物語られる人生

早朝に窓ガラスを叩く雨音が聞こえてきた。それは静かな形で鳴る自然の目覚まし時計のようであった。今朝私は、窓ガラスにしたたる雨音によって目覚めた。昨日の就寝前に少しばかり雨が降り、それが止んだ後に昨夜は寝ることになったのだが、ちょうど目覚めの時間帯と重なってまた雨が降り出した。

今日は五時前に起床し、五時半を迎える前に一日の活動を開始した。雨によって起こされ、雨音を聞きながら一日を開始させたという点において、今朝はいつもとは少しばかり異なる。そんな土曜日の朝である。

---

雨が降っているため、薄い雨雲が空全体を覆っている。それは嫌な雨雲には見えず、雲それ自体は薄い。天空からしたたる雨と共に、時折微風が吹いている。こんな天気であるが、昨日と変わらずに小鳥たちのさえずりが聞こえて来る。

早朝にゆっくりと日記を書き留めていると、雨がほとんど止んだ。こんな時間帯であるが、早速一台の車が目の前の通りを走って行った。乾いた道路ではなく、雨で湿った道路を走る固有の音が聞こえて来た。天気予報を確認すると、今日は夜にまた雨が降るらしい。そして今日から来週の土曜日にかけては涼しい気温になるようだ。

今朝方、久しぶりに夢を見ていた。大学時代から付き合いのあるドイツ人の友人の自宅を訪れ、彼の妻と子供たちと和やかに過ごす夢。夢の中で私は、友人の子供が英語を話せるのかをまずドイツ語で確認した。子供たちは少し当惑した表情を浮かべたが、英語が話せると笑顔で述べた。

そこからは友人の家族と一緒にあって英語で談笑するような内容を持つ夢であった。夢を見たのは久しぶりであり、記憶に残っているのはごくわずかだが、それを書き留めておくことにも意味があるだろう。旅で得られたどんな些細な印象や感覚でもそれを書き留めことによって、後々思わぬところで役に立つ。そして何より、そうした印象や感覚を書き留めておくことが自らの肥やしになっていく。

雨の目覚まし時計が鳴る音が聞こえて来る直前、私は最後の夢を見ていた。それは無意識の世界で見た夢というよりも、ほぼほぼ覚醒意識の状態で知覚されたものであったかもしれない。私はそのような半覚醒の状態で、「ラスキン」という国籍不明の見知らぬ人間について物語を紡ぎ出していた。彼の生涯を辿るような形で、私は彼にまつわる物語を読み上げていた。

言葉だけが夢の中でこだまし、こだました言葉がイメージとなって喚起されるような夢だった。窓ガラスを打ち付ける雨の音が聞こえてきたのはその夢が終わりに差し掛かる頃だった。雨音によって目覚めてから、起床直前に見たこの夢について少しばかり考えていた。ラスキンとは一体誰だったのだろうか。

私は彼の生涯にまつわる物語を読み上げる中で、ある重要なことに気づいた。それは物語ることの意義である。一人の人間の一生は、語るものであると同時に、語られるものなのだ。物語に潜む力が自分の背中を押している。

---

---

時刻が六時に近づいてくると、小鳥たちのさえずりが一層はっきりと聞こえてくるようになった。雨はどうやら完全に止んだようであり、雨が屋根からしたたる音が聞こえなくなった。

今日を生きるということ。今日を物語るということ。そして今日が物語られるということ。私は日々、ある一つの壮大な物語の中に生きていて、同時にその物語を紡ぎ出している。物語り、物語られるこの人生はどこまで続いていくのだろうか。そのようなことを考えさせられる土曜日の朝だ。フローニンゲン:2018/6/9(土)05:47

#### 2674. デ・ホーヘ・フェルウェ国立公園及びクレラー・ミュラー美術館の再訪に向けて

どうやら完全に外は晴れたようだ。早朝に空を覆っていた雨雲が今はうっすらとした雲に変化している。優しいそよ風がフローニンゲンの街を時折駆け抜けていく。その風の流れに乗って、小鳥たちのさえずりが聞こえて来る。

ここ最近ではバッハではなく、モーツァルトのピアノ曲を聴いている。ほぼ毎日、一日中モーツァルトを聴くような状態にある。この状態はもうしばらく続くだろう。モーツァルトのピアノ曲の音色と小鳥たちのさえずりがどこか似たような感覚質を持っていることに時々気づく。小鳥のさえずりとモーツァルトの曲を同時に聴くその瞬間に、私の心は何か満たされたような感じになる。今日もそのような瞬間がたびたび訪れるだろう。実際に今もそのような状態にある。

心が満たされた形で日々を過ごしていくこと。これがどれほど重要なことだろうか。何となれば現代社会は、常に渴望を私たちに強いるのだから。日々の些細な事柄には心を満たすもので満たされている。まさに、満たすものが満たされているのである。

心を満たす世界の中に溶け出しているかのような感覚がする。充滿した世界に溶け出すことによって、自己が充滿したものになっていく。世界も自己も最初から充足したものであるということに気づくことはそれほど難しくない。現代社会から忘れ去りつつある諸々の重大な真実に気づけば。

昨夜から、先日アムステルダムで訪れたヴァン・ゴッホ美術館で購入したゴッホの生涯を描くドキュメンタリーDVDの二回目の視聴に入った。今回は英語ではなく、あえて日本語で解説を聴いている。



---

ゴッホの生涯からもたらされる励ましには多大なものがある。ドキュメンタリーを見ながらつくづく思っていたのは、ゴッホには伝えたい明確なものがあったのだ。

絵画の技術がそれほど洗練されていない当初から、ゴッホの内側には表現しようとする何かが常に存在していたのである。ゴッホが絵描きになる前に、彼は牧師になろうと勉強や実践に励んでいたことは有名な話である。弟のテオに宛てていた手紙も、ある時を境に突然宗教的かつ道徳的なものになり始める。ゴッホの内側にあった強烈な信仰心と信念。その二つが相まって、牧師の道を断念し、絵描きを志したゴッホは信仰心と信念を元に、内側にある表現を待つものを力強く外側に表現し始めた。

ゴッホの手紙を改めて読み返していこうと思う。これまで購入した六冊のゴッホの画集についても繰り返し読んでいこうと思う。

来月の中旬もしくは来月末に、オッテロー村にあるクレラー・ミュラー美術館を訪れる。今年の秋に引き続き、今回が二度目の訪問となる。デ・ホーヘ・フェルウェ国立公園内にある秋のクレラー・ミュラー美術館はとても美しかった。美術館のみならず、それを取り囲む自然がとても美しかった。

夏のデ・ホーヘ・フェルウェ国立公園とクレラー・ミュラー美術館はどのような表情を見せてくれるのだろうか。今からそれへの期待が高まる。クレラー・ミュラー美術館はこれまで何度も言及しているように、アムステルダムのヴァン・ゴッホ美術館に次いで、ゴッホの作品を世界で二番目の数ほど所蔵している。昨年クレラー・ミュラー美術館を訪れた時、所蔵されている作品の豊富さには驚かされた。

どの作品が自分の足を止め、自分を虜にしたかを今でも覚えている。今回の訪問の際には、再びそれらの作品を眺め、今年の秋との印象の変化を確かめる。国立公園と美術館の双方を味わうためには日帰りではもったいない。そのため、今回は二泊三日の国内旅行という形でデ・ホーヘ・フェルウェ国立公園近くのホテルに宿泊する。

初日はホテルのチェックインに合わせて現地入りし、近くをぶらぶらと散歩する。翌日にデ・ホーヘ・フェルウェ国立公園で自転車を借り、サイクリングをしながらクレラー・ミュラー美術館を目指す。オディロン・ルドンの特別企画を含め、美術館に所蔵されている作品をゆっくりと鑑賞したら、カフェで

---

休憩をしながら日記でも書き留めたいと思う。七月の小旅行に今から少しばかり心が躍る。フローニンゲン:2018/6/9(土)06:16

### 2675. 小雨降る土曜日の朝に

今朝は五時前に起床したため、早いもので起床から四時間が経とうとしている。朝早くに起きて一日を開始させると、午前中の間にいろいろなことに取り組むことができる。先ほどまでは日記の執筆に並行して、音楽理論のテキストを読み進めていた。その書籍は300ページを越す分量を持っているが、解説の英語は非常に平易だ。早朝の読書によってすでに四分の一を読み進めることができた。実は今回が三読目であることも読解をスムーズなものにしていたように思う。

今日はこれから過去の日記を少しばかり編集し、その後にもた本書の続きを読み進めたい。この調子で読み進めることができれば、本日中に半分以上を読み終えることができるのではないかと思う。音楽理論に関する知識を少しずつ拡充させていくことによって、作曲実践がより豊かなものになっていくだろう。ちょうど先日、九月からはどの大学にも所属はしないが、フローニンゲン大学で提供されている音楽に関するコースを聴講したいと考えた。

そうでもない限り、私はおそらく買い物以外は自宅から外に出ないだろう。一週間に一度ぐらいは外に出かけ、大学の雰囲気の中に身を置くのも悪くないように思える。何よりもそれは良い気分転換になるだろう。調べてみると、昨年にクラシック音楽の歴史と音楽理論に関するセメスターのコースが提供されていることを見つけた。もし今年もそのコースが提供されるのであれば、ぜひ講義を聴講したいと思う。

今朝方に雨が降り、それが一旦止んでまた雨が降り始めた。それもまた止んで今は再び雨の降らない曇った天気となっている。小鳥が早朝からずっと小さく鳴き続けている。ここ数日間、書斎の窓に小鳥が休みにやってくる光景を何度か目撃した。先ほど書斎の窓を開けてみると、小鳥が訪れた痕跡があった。そしてよくよく見ると、小さな糞が残されていた。窓際の風の通り道に糞が残されているが、これも今日の雨によって洗い流されるだろう。

今日はこれから過去の日記を編集し、音楽理論に関する書籍を読むことに合わせて、旺盛に作曲実践をしていきたい。ここ最近では毎日二曲作っている。昨日は三曲作った。作曲をする際にも、文

---

章の執筆と同じであり、集中力と共に、内側のを外側に表現していくエネルギーのようなものが要求される。それらを総合して考えると、一日に二曲作るというのは今の自分にとって適量だと言える。

仮に余力があり、創作意欲が依然として高い状態であれば三曲目をその日に作るというのが賢明だろう。これからは毎日、少なくとも二曲作り、自分の心身の状態を見て三曲目を作る。一日三曲以上作る日も不定期に訪れるかもしれないが、とりあえず今はそこまでの量を作ることを自らに課さない。実践は最良の学びをもたらすが、今の私は作曲実践に並行して、音楽理論や作曲理論に関する知識を取り入れることも大切であるということをおぼえてはならない。

ゴッホが絵画の修練を積んでいる時、ミレーの作品に範を求めていたのと同じように、私も引き続き過去の偉大な作曲家に範を求めていく。核となるのは、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、バルトークであり、時折他の作曲家、特にショパンに範を求めていく。その他にも、テレマン、クレメンティ、シューベルト、リスト、ドビュッシー、サティ、グリーグ、フォーレ、スクリャービンらの楽譜があるため、彼らの曲については不定期に参照することになるだろう。まずは核となる作曲家の曲を全て参考にし、その後他の作曲家の作品から積極的に学びを得ていこうと思う。

現在所持している楽譜はすでにかかなりの量になるが、それらに掲載されている曲は全て参考にしようと思う。全ての曲に範を求める形で一度曲を作り、同じことをもう一度全ての曲に対して行えば、随分と作曲技術が高まっているだろうと期待される。その頃には、自分なりの文体とでも呼ぶべき作曲技法が獲得されているのではないかと期待する。今日はバッハとモーツァルト、そしてショパンに範を求める形で三曲作る時間があるかもしれない。このように毎日少しずつ進歩を遂げていく。フローニンゲン:2018/6/9(土)09:19

### 2676. さざ波のような転調に向けて

今日の早朝は雨が断続的に降っていたが、昼前から晴れ間が広がり始めた。今は夕方の五時を迎え、太陽が姿を見せており、西日を地上に照らしている。今日も静かに、そして充実した形で過ぎ去っていく土曜日であった。先ほど一週間分のカレーを作り終え、過去の日記の編集も済ませた。

---

これから夕食までの時間に作曲理論に関する専門書の続きを読み進めていきたい。夕食後からは本日二度目の作曲実践を行う。

今日は午前中にすでに一曲を作った。その際はバッハに範を求めた。ここ数日間をあえてバッハから離れ、モーツァルトやショパンの曲を参考にしていた。今日参考にしたバッハの曲は参考にするのが意外と難しく、思っていた以上に時間がかかった。結局二時間半ほどの時間をかけて一応の形となった。その際に作った曲は繰り返しも含めて二分以内のものである。私にとってはそれでも十分に長い曲だ。

とにかく一分間、もしくは一分半以内の短い時間の曲の中で、自分が表現したいと思うことを十分に形にしていくことを意識したい。短い詩のような、短歌のような、はたまた俳句のような曲をとにかく大量に作っていききたい。主題がごちゃ混ぜになることを避けるためにも、短い曲を作っていくことが大切だ。さらには、これから数年間は修練の時期であるから、短い曲を作る中で様々なことを試したいと思う。

事前に仮説を立て、それを検証するかのように一曲一曲を作っていく。曲を作る過程の中でも仮説検証を含め、あれこれと試行錯誤をしていく。そうしたプロセスを経ながら作曲実践に励むことによって、見えないところで徐々に作曲技術の力が磨かれていくだろう。

私はむしろ学術機関で音楽に関するトレーニングを受けなかったことを有り難く思う必要があるかもしれない、と最近よく思う。ゴッホを見てみよう。ゴッホの辿った軌跡を追いかけていくと、学術機関でのトレーニングなどそれほど必要でないように思える。ただし必要なことは、何よりも自らの内側に表現したいと思う強烈な主題を持つことであり、同時にその主題を形にするための固有の手法を自ら構築していくことだ。どんな偉大な作曲家も既存の作曲手法を超えて、自らの固有の主題を表現するための独自の作曲手法を獲得していたことに注目しなければならない。

モーツァルトの変奏曲を聴きながら、改めて短い曲を作っていくことの意義を昨日感じていた。ピアノソナタなどの長い曲には手を出さず、ここから数年間はとにかく大量に短い曲から学びを得ていく。その中でも、ここ最近少しばかり試したいことが幾つかある。一つには、曲の中で小刻みに転調を適用することだ。イメージは、一つの曲の中で転調のさざ波を生み出していくというものである。こ

---

の着想をふと得たのは、先日ウォルター・ピストンのハーモニーに関する専門書を読んでいた時だ。

これまでは八小節の区切りで転調を適用させていたが、例えば、実験的に地球を一周するかのよう  
に、五度圏を全て一つ一つ辿るように短い小節の中で転調させてみることを試してみたい。一分や  
一分半の短い曲の中では、それが難しいかもしれないが、仮に48小節あれば、四小節ごとに転調  
させれば12の調を辿っていくことができる。仮に長短合わせて24の調を辿るのであれば、二小節ご  
とに転調しなければならず、それは少しやりすぎだろうか。12の調を全て辿らないにせよ、長短を織  
り交ぜたりすることも含めて、小節の短い区切りの中で転調を活用してみる実験を近々してみたいと  
思う。フローニンゲン:2018/6/9(土)17:30

### 2677. それがそれであること

今日も昨日に引き続き五時前に目が覚めた。五時半を迎える手前から一日の活動をゆっくと開始  
させた。

今日は日曜日であり、いつも以上に辺りが静寂である。そんな静寂な世界の中で、小鳥たちの黄  
色いさえずりが聞こえてくる。毎朝このようにして鳥の鳴き声に耳を澄ませてきたことによって、鳴き  
声からようやく鳥の種類がわかるようになってきた。今鳴いているのはおそらくスズメだ。

ここ数日間書斎の窓辺に訪れていたあのスズメたちが、今早朝の静寂な世界のキャンバスを黄色  
い鳴き声で色を塗っている。今はまだ薄い雲が空を覆っているが、これから晴れてくるようだ。今  
日は一日を通して涼しく、明日から数日間は肌寒い日となる。早朝に吹き抜ける冷たい風が街路樹  
の葉を揺らしている。その揺らぎを見ているだけで心が静かになっていく。

安らぎの中で絶えず自らの活動に励むこと。今日もそのような一日となり、欧州での三年目の生活  
の毎日がそのようになる。欧州での生活は一旦三年で区切り、やはり米国に戻るのが良いのか、そ  
のまま欧州に残る方がいいのか。その点についてこここのところよく考えている。

今のところ米国に戻ることを最優先させる計画を立てているが、はっきりとしたことはまだわからない。  
仮に米国に戻ったとしても、いつか再び欧州に戻ってくることは確実なような気がしている。その時

---

もまたしばらくオランダで生活をしたいと思う。同時に、ハンガリーなどの中欧諸国かノルウェーなどの北欧諸国で生活をしたいと思う自分もいる。今後の生活拠点についての考えは絶えず頭の片隅にあるだろう。それをゆっくりと育み、しかるべきタイミングでしかるべき場所で生活をしようと思う。今の自分にはそれぐらいしか言えない。

昨日、心臓の鼓動と大地の脈動が合致するかのような感覚があった。言い換えるとそれは、顕現世界の森羅万象の律動を感じているような感覚だった。今このようにして小鳥たちの鳴き声に耳を傾けているのも、自然および他の生命と自己に共通する脈動を感じていることに他ならない。今鳴き声を上げているのはスズメではなく、全身が黒く、口ばしが黄色い名前のわからぬ小鳥だ。とても特徴的な鳴き声をしている。ちょうど目の前の一本の街路樹に止まっており、その姿を今眺めている。

その小鳥は顔をキョロキョロと動かしながら辺りを眺めており、時折全身の動きを抑え、どこかを正視している。また時々枝から枝へとせわしなく移動しながら、またその場に立ち止まる。そんな光景が見える。

欧州での生活が二年目を迎えた頃であろうか、私は日々の生活の中で、多様な生物たちが身近なところに存在していることに驚かされることがよくあった。例えば鳥たちが大空を舞っている光景を眺めては、「なぜこの世界に鳥たちが存在しているのだろうか」とふと考えることがよくあった。同時に、鳥たちが存在していることによってもたされる世界の彩りの素晴らしさにハッと気づかされる瞬間が何度もあった。これは何も鳥たちに限ったことではなく、目の前の街路樹や道端の花や雑草に対してもそう思うことがよくあった。

さらには、小さな虫や道を歩く人々に対してさえそのようなことを思うことがよくある。この世界に溢れる多様な存在者たち。自分もその一人であり、それらがこの世界に彩りを添えている。

欧州での生活が三年目を迎える今に至って、人生を歩んでいくことの意味と、人生が終わることの意味が見え始めている。歩き続けることの意味と、歩くことが終わることの意味が徐々にわかり始めているのだ。しかもそれは直感的な認識であり、決して知的解釈ではない点が大切だ。直感的に「それがそれである」ことがわかり始めている。もうわかり始めているのだ。

---

「それがそれである」というのが絶対的な解答であり、それ以外に解はないように思える。なぜならそれが絶対的なものであるからだ。フローニンゲン:2018/6/10(日)05:50

## 2678. 作曲のステップ

今日も読む。今日も書く。今日も作る。そんな一日が始まった。

時刻はまだ六時手前である。今は起床直後よりも世界が明るく感じられる。確かに空は薄い雲で覆われているのだが、明るくなったと知覚できる自分の心がここにある。

読む、書く、作る。この三つで満たされた毎日。この三つさえあれば十分な毎日。この三つと共に人生を緩やかに深め続けていく毎日。毎日がそのような日々だ。そのようなことを考えていると、「毎日が毎日であること」に気づいた。これは実に面白い。毎日が毎日であったか。日々は文字通り日々なのだ。

一羽の黒い小鳥が今空を羽ばたいていく姿が見えた。

今日も読み、今日も書き、今日も作るという生活。今日はまず、プラトン全集の続きを読みたい。ただし、この全集を読んでいて気づいたが、今の自分に関心のない対話編はほとんど頭に入っていない。そのため今日は、1022ページ目から始まる、音楽哲学に関する箇所を読み進めたいと思う。この箇所を読み終えたら、一旦プラトン全集は本棚にしまおうと思う。

これまでは書斎の机の右上の隅に置いていたが、いかんせん2000ページ近い大著であるから場所を取っていた。まずは当該箇所を読み終え、本棚にそっとしまいたい。プラトン全集に着手した後は、昨日に引き続き音楽理論の専門書を読み進めたい。この書籍については今回が三読目であるため、すでに理解している箇所もあり、読解が思っていた以上に進んでいる。

昨日だけでも半分近く読み進めた。今日も昨日と同じ調子で読み進めることができれば、今日中に本書を読み終えることができるかもしれない。三読目を終えることができれば、明日からは四読目に入り、その際には理解が不十分な箇所だけを取り上げて読み進めていく。こうした読書を行っても

---

午前中にはまだ時間があるだろうか、その後には少しばかり作曲実践を行いたい。できれば午前中に一曲作ることができれば理想的である。

今日も昨日に引き続きバッハに範を求めようと思う。昨日はバッハの曲を参考にしていたが、一つの曲を作り上げるのに随分と時間がかかった。その理由について考えてみると、今の私が行っていることの特質と関係しているように思う。今の私は、例えばバッハの曲を参考にするのであれば、まずはバッハが曲に埋め込んだパターンを把握することに努めている。バッハが身体知として保持していたものが形となって現れたそのパターンを把握するのである。それがまず第一ステップだ。

そのパターンをまずは外形上把握していく。メロディーの構造、ハーモニーの構造、リズムの構造などを視覚的に捉えていく。把握されたパターンをもとに別のパターンを作り出していくことが次のステップになる。もちろん今はバッハから学びを得ている段階であるから、パターンそのものを大きく変えるのではなく、そのパターンに基本的には沿う形でパターンの組み合わせ方を変えたり、自分の閃きに基づくちょっとした工夫を施すようなことをしている。

このステップはある意味試行錯誤を伴うため、その試行錯誤が長ければ長いほど、一曲を作る時間は相対的に長くなる。昨日はそもそも最初のパターン把握のステップで時間を取っていたため、結果として一曲作るのに多くの時間を要した。

今日参考にする曲がどのような構造を持っているのかは未知であり、楽譜を開いてみなければわからない。そのため、一曲作るのにどれだけ時間がかかるのかも読めない。しかし今は、そうした未知な状況すらも—あるいはそれこそが—充実感を与えるものになっている。作ることの中に内在的に宿る充実感。今は本当にそれを全身で感じながら一つ一つの曲を作っている。

一つ一つの曲に潜む固有のパターンを把握し、それを自らの糧にしながら曲を作り続けていくこと。無数のパターンの把握とそれを基にした作曲実践は今後数年間続くだろう。ゴッホがミレーに範を求め、様々な画家の技法から学びを得ながら習作を描き続けた点を見習う必要がある。

今日は午後から街の中心部にあるルター教会でバッハのアンサンブルコンサートがある。これは以前から楽しみにしていたものであり、いよいよ今日がその日だ。会場までは歩いて15分程度であり、程よい散歩になる。今日は天気にも恵まれることもあり、教会でコンサートを聴いた後は、少しばかり

---



---

街の中心部を散策しようと思う。今日も充実した日曜日になると確信している。フローニンゲン:2018/  
6/10(日)06:13

No.1059: Chilly Emotions

Today is somewhat cloudy, and it is chilly. Chilliness in the exterior world sometimes corresponds to that in the interior world, whereas sometimes doesn't. I can say that the former is true today.  
Groningen, 07:59, Wednesday, 7/11/2018

2679. 今朝方の夢

新鮮な空気を入れるために起床直後から窓を開けていたが、肌寒く感じ始めたので先ほど窓を閉めた。今日の気温はそれぐらいに涼しい。

うっすらとした雲が空を覆っており、その隙間からごくわずか晴れ間が見える。今日は午後三時から、街の中心部のルター教会でバッハのアンサンブルコンサートがある。その頃にはもう少し気温が上がっていることを願う。この肌寒さを考えると、今日は長袖で外出した方がいいだろう。もし仮に太陽が顔を覗かせて、日差しが照り始めれば半袖でもいいのかもしれないが、今のところ長袖で外出することが賢明のようだ。

先ほど音楽理論に関する書籍を随分と読み進めた。この分だと今日中に読み終えることができるだろう。コンサートの待ち時間にも読もうと思っているので、忘れずに本書を持参したい。コンサートが終わってから街の中心部で買い物をして、ゆっくりと散歩をしながら自宅に戻ってこようと思う。

今日はこれから過去の日記を少しばかり編集することと合わせて、作曲実践を行いたい。その前に少しばかり今朝方の夢について思い出していた。夢の中で私は、小中学校時代の旧友たちと共に旅行に出かけていた。それはどこか当時の修学旅行を思わせる。というのも、同じ学年の友人たちが何人もその場において、さらには引率として当時の先生方もその場にいたからだ。

どうやら旅行先は日本国内のようであり、海に見える旅館が立ち並ぶ場所にいた。私は何人かの友人たちと共に、城下町のような古風でありながらも落ち着いた雰囲気を持つ街中を歩いていた。道

---

の両脇には、いつの時代に建てられたのかもわからない木材建築の家や藁でできた家などが立ち並んでいた。そうした歴史を感じさせる家々の間には土産屋が所狭しと並んでいた。

私たちは趣のある古びた家々を眺めたり、土産屋に並んでいる品々を眺めながら歩いていた。幾分か散歩をした頃だろうか、そろそろ帰る時間となってきたことに私は気付いた。この城下町へは船でやってきたため、帰りも船に乗る必要がある。気がつけば帰りの船の時間が迫ってきていた。そのため、私たちは船着場に向かった。

すると、私たち生徒と一緒に帰る船はあと二時間後に出発する予定になっていた。早めの夕食を摂り終えたらちょうど良いような時間帯である18:50に船が出発することになっていた。先ほど歩いてきた城下町のどこかの店で早めの夕食を摂ろうと私は考えていたのだが、友人の一人が今すぐにでも帰りたいと述べ始めた。すでにこの町を十分に見たとのことであり、一刻も早く船に乗りたいという彼の思いが伝わってきた。

原則として生徒全員一緒に帰ることになっていたのだが、その友人はあと五分で出発する船に乗る気でいた。彼の方を見ると、すでに荷物を手に抱えている。私もわざわざあと二時間ここに残る必要はないかもしれないと思い始めていた頃だったので、彼と彼に賛同する友人たちと一緒に船に乗りたいと思った。しかし私はまだ帰る支度をしておらず、手には荷物を持っていない状態だったので、一緒に帰ることは無理であった。

結局私は、友人を船着場で見送り、一人で城下町を歩きながら宿泊先の旅館まで帰って行った。そこで静かに夢の場面が変わった。

次の夢の中では、大学時代に履修していた経営戦略の授業を担当していた教授と偶然ながら再会した。その教授は今では経営戦略の大家であるが、私は当時履修していた授業を懐かしみながら、その教授に何の気兼ねなく話しかけた。

するとその教授は私を覚えていてくれたようであり、そこから少しばかり話の花が咲いた。私はその教授に「当時購入した先生の書籍を今でも持っている」ということを伝えた。教授は嬉しそうな照れ笑いを浮かべながら私の話を聞いていた。すると教授の方から私の進路について質問があり、私は

---

経営学の博士課程に進むのではなく、社会学の観点から企業文化を捉えるような研究に着手することにした、と述べた。

するとその教授は満面の笑みを浮かべ、「それはいい選択だ」と述べてくださった。実はその教授はもともと社会学を専攻しており、のちに経営戦略の領域に携わるようになった。教授自身のそうした過去が私の進路への理解につながったのかもしれない。終始談笑をしたところで夢から覚めた。

改めて最後の夢を振り返ってみると、今の私は経営学はおろか、社会学の観点から企業文化を捉えることにも興味はほとんど無い。どうして夢の中の私はそのような進路を歩むことを述べたのだろうか。

一羽のカモメが曇った空の下を優雅に飛んでいく姿を見た。今の時間帯は早朝よりも風が強い。肌寒さが残るフローニンゲンの夏。おそらく六月の中旬に近づいてきているため、今の時期を夏と言っていいのだと思う。気温は一切そのようなことはないのだが。暖かいコーヒーでも飲みながら仕事の続きに取り掛かろうと思う。フローニンゲン:2018/6/10(日)08:41

#### No.1060: A Dance of Clown

I often think that various stories in this reality look like dances of clown. Whereas they sometimes look charming, they sometimes look distasteful. Groningen, 08:12, Wednesday, 7/11/2018

### 2680. ルター教会での演奏会

初夏の爽やかな風がフローニンゲンの街を駆け抜けていく。時がそれを追いかけるように走っていく。

今日も気がつけば夕方の六時を迎えた。先ほど、街の中心部にあるルター教会で開催されたバッハのアンサルブルコンサートを聴きに行った。私はその教会を別の教会と誤解しており、コンサートの10分前まで別の教会にいた。フローニンゲンの街で有名なのはマルティニ教会であり、市場を挟んで反対側にある教会も大きなものであり、私はそこをルター教会だと勘違いしていた。

---

教会の中に入ってみると、確かにそこでもコンサートが行われるようであり、私は係員らしき人に質問をした。「ここは以前教会だった場所です。今日はここで無料コンサートがあります」とその係員は述べた。その回答を聞いた時、ルター教会は今でも教会のはずであり、過去形にされるのはおかしいと思った。また、今回のコンサートは無料のものではなく、プロによる有料の演奏のはずだった。

その教会の中に入ってみると、数多くの椅子が綺麗に並べられており、楽器の準備も万端のようだった。ふと演奏者たちが座る方向を眺めてみると、スクリーンが下がっており、そこにアンネ・フランクが映し出されていた。どうやらアンネ・フランクを追悼しての演奏会か、誕生日を祝う演奏会が無料で行われるらしかった。これは私が参加しようと思っていたコンサートではないとその時にすぐに気づいた。

確かにアンネ・フランクに関するコンサートにも関心があったが、私は急いで携帯の地図をそこで初めて確認した。すると、確かに近いのだがルター教会は別の場所にあることによりやく気付いた。私はそこから小走りをしてルター教会に向かった。演奏開始の二分前に教会に到着し、そこでチケットを購入して席に着いた。席に着いて数十秒してコンサートが始まった。

今日とはとても涼しかったのだが、小走りしたせいもあって、額に汗がにじんでいた。その汗を少しばかり拭くとコンサートが本格的に始まっていった。教会に到着するのが遅かったため、私は音楽に集中するよりもまず先に、教会内のスタンドグラスなどを眺めていた。

今回はパイプオルガンのコンサートではなく、アンサンブルコンサートである。途中で休憩を挟み、合計で二時間ほどのコンサートであった。演奏の最中、私は特に数名の歌手たちに注目していた。声の質や大きさにとりわけ意識を集中させていた。演奏の最中には視覚情報が邪魔になることもあったため、目を閉じて静かに演奏を聴くと、随分と色々な発見があった。

休憩を挟んで二時間のコンサートは本当にあっという間に過ぎ去っていった。演奏の最中に私の意識は黙想的になり、音楽に身を委ねながらも、あれこれと考え事をしていった。それらの考え事はこうしたコンサートに参加しなければ生まれないようなものばかりであった。それらについては今後折を見て書き留めることになるだろう。

---

今回初めてルター教会に足を運んだが、小さいながらも落ち着きがあり、また足を運びたいと思わせるような教会であった。休憩中に幾つかパンフレットをもらい、調べてみると、毎月の多くの土日に演奏会が開かれていることがわかった。フローニンゲンにはマルティニ教会を含め、その他にも幾つか教会があり、各教会で週末には演奏会が行われているようだ。フローニンゲンで生活する三年目は積極的に教会に足を運び、週末の演奏会に参加したいと思う。

次回ルター教会に訪れるのは、7/15(日)15時からのバロック時代のオルガンコンサートに参加したい。今日のコンサート体験についてはまた改めて書き留めたいと思う。とりあえず忘れずに先ほどの体験を書き留めておこうと思ってこの日記を書いた。フローニンゲン:2018/6/10(日)18:15

#### No.1061: Water Spirits

A new day began. The hours in the morning in Groningen have a very tranquil atmosphere. I feel as if water spirits came from somewhere. Groningen, 07:18, Thursday, 7/12/2018